

昭和二十八年十二月二十日
初版印刷
昭和二十八年十二月二十五日
初版發行

昭和文學全集 27
小泉信三集

著者 小泉信三

發行者 角川源義

印刷者 小田茂作

東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

かど かしやてん
角川書店

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

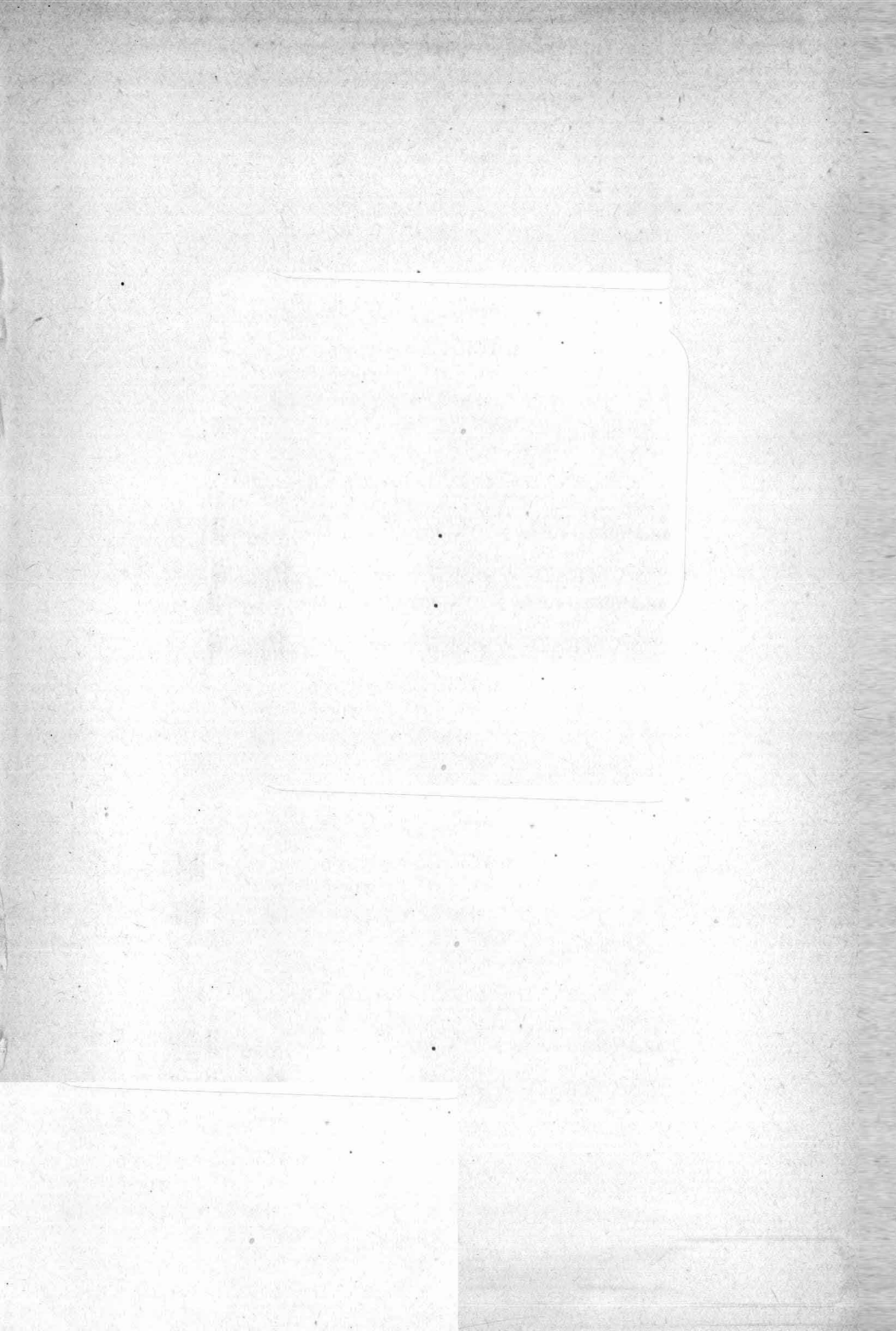
本文紙
クロース
整版所
印刷所
製本所
本州製紙株式會社
日本クロース工業株式會社
中光印刷株式會社
東日本印刷株式會社
小泉製本所

Printed in Japan

33994 印書館

小泉信三集

昭和文學全集
角川書店版



今の日本

今の日本

反省

青い鳥

力抜け山

衣食と禮節

孤忠の精神

私の身邊

米内光政

露伴の日記

半夜詩を読む

—— 鷗外の「うた日記」——

漱石の「金」

花の記憶

戦時の花

讀書の記憶

共產主義と人間尊重

共產主義と人間尊重

共產黨宣言の今昔

學問藝術の自由と其限界

二九三

二九三

二九三

二九四

二九五

二九六

二九八

二九八

二九九

二九九

三〇〇

三〇一

三〇二

三〇三

三〇四

三〇七

三〇三

三〇三

三〇六

三〇二

福澤の歴史觀と愛國論

——『文明論之概略』について——

平和論

平和論

再び平和論

—— 一切に平和を願ふものとして——

内外の平和

朝の思想

朝の思想

一つの場面

私の二十の頃

わが枕頭の書

平和と理解の使節

學問の道

旅 信

解 說

年 譜

富田正文

三〇二

三七五

三七五

三八〇

三九五

三九五

三九五

三九五

三九五

三九五

三九五

三九五

三九五

三九五

三九五

三〇〇

三〇六

四〇八

四〇三

小泉信三集

小泉信三集

		子	と	幸	は	い	人	あ	
	2	あ	の	病	能	に	主	る。	私
	水	い。	以	と、	心	万	動		は
	ハ		校		あ	能	か	ま	思
	人		は、	ま	る	薬	す	の	ふ。
	ま			の	ま	と	マ	弱	
	の		十	あ	て	ま	ル	点	柳
	画		分	に	も、	る	く	ま	元
	島		博	あ		ま	に	算	脂
	ま		重	あ		マ	ま	し。	疑
	短		心、	あ	ま	ル	△		と
	し			あ	ま	マ	ま	あ	将
	あ		殿	あ	ま	マ	病	水	嫌
	と		心	あ	マ	ま	人	焼	人
小	2		あ	あ	マ	比	の	焼	召
泉	ろ		あ	あ	商	校	弱	助	の
後	い		あ	あ	ま	ま	弱	ま	弱
三	あ		あ	あ	ま	る	ま	一	路
	る。		あ	あ	ま	の	算	て	で

マルクス死後五十年

前文

マルクスが死んだのは一八八三年三月十四日のことであるから今年（昭和八年）三月は正にその死後五十年に相當する。この機會にこの五十年を回顧して、マルクス及びマルクシズムについて若干の所感を述べたいと思ふ。

私はマルクス心酔者ではないし、また、たびたびの機會に彼に對する反對批評を試みた。しかし今日吾々同様もしくはその以下の年輩の文筆者でマルクスを知らず、また全くその影響を感じないといふ者はあり得ない筈だと思ふ。私は嘗て拙著の小經濟思想史中にマルクスのことを述べたところで大體左のやうに書いた。

まことにマルクシズムには許多の誇張偏頗獨斷矛盾が藏せられてをり、これを指摘することはまた必ずしも難事ではない。しかしこれらの缺點あるに拘らず、發言者の直覺と革命家的情熱と透徹せる異常の推理力とによつて、さうしてこれに加ふるに精勵無比なる文獻涉獵に基づいて書かれた「資本論」は、恐

らく十九世紀後半に於ける經濟學に對する最大の貢獻を以て許すべきものであらう。マルクシズムは十九世紀末葉に至つて、ドイツ・フランス・イギリス・ロシア等に於ける社會黨の綱領に採用せられ、二十世紀に入つてからはロシア革命の指導理論となり、一部分はその學問的價值自體のため、一部分はこれらの實踐的影響のために、現代に於ける社會科學の研究に對する最大の刺激者となつた。云云。

また別の機會には書いた。概して獨創多き著者は多く讀書せず、多く讀書するものは獨創を缺くのが常であるのに、マルクスにあつては珍しくもこの兩者が充分の程度に兼ね備はつてゐると。

右はいづれもマルクシストでない者にも同意される點であらうと思ふ。

マルクシズムの現代にとつての意義はこの通りであるが、しかしマルクシズムが理解されるまでには割合に時を要した。「共產黨宣言」の後約三十年、「資本論」公刊の後約十年の一八七五年に、肝心のドイツ社會黨がゴータ綱領のごときマルクシズムに理解を缺いた綱領を決定採用した一事だけでもその消息を窺ふことができる。ドイツ社會黨員中かなり多數の者は始めはラッサアルの指導に従ひ、後にはオイゲン・デューリングのマルクス批評にも耳を傾けた。エンゲルスがかの「反デューリング論」を黨の機關紙「フオー

エルツ」に連載し始めた時には、黨内にエンゲルス攻撃の聲が起り、その寄稿の續載を禁止すべしといふ決議案が僅かのところで通過しさうな勢であつた。それが漸く或る人の提案で、これを「フオーエルツ」本紙でなく、その特別附録に連載することにして問題が片附いたといふことである。今日の狀態と比較すれば誠に隔世の感がある。

マルクスにとつては、エンゲルス及び極く少數の者以外にはかくその本國に於てすらその理解者を見出し得ないといふことはよほど不愉快であつたらうと想像される。彼は實踐運動者として不成功に終つたのみならず、思想家としても、その生前に於ては不遇の人であつた。彼がブラツケその他宛ての回狀中に、ゴータ綱領案を逐條的に小意地惡く批評した不機嫌な語調は、この不愉快から説明されるものであらう。それだから偶、「資本論」の理解者を見出すことは、マルクスにとつては非常な満足であつたらしい。一時彼がフオン・シュパイツェルに好意を示したのもそのためではなかつたかと想像される。

シュパイツェルはマルクス、エンゲルスが秘かに敵視したラッサアルの後繼者であつて、その親ビスマルク政策は無論マルクスの許し得ぬものであつたのみならず、マルクスの指示に對して、理論上の教へは有難く拜聴するが、運動戰術上の指圖は受けぬ、「時々の黨略の實際問題については、予は貴下がこれ

らの事物に判斷を下さんがためには、運動の中心にゐなければならぬことを一考せられんことを乞ふ」(云ふまでもなくマルクスは當時ロンドンにゐた)といふ無遠慮な答へをしてマルクスを怒らせた人物である。しかし彼の理論把握の能力は當時の多くの社會主義者、殊にマルクスの弟子リイブクネヒト等に比較して遙かに卓越してゐたものと見え、その後一八六八年になつて「資本論」に對して極めて理解ある評論を試みた。その後間もなくマルクスはシュワイツェルに與へた手紙にかう書いた。「予は貴下が労働者運動上に發揮せらるゝ才智と氣力とを無條件に承認する。予は予のこの意見を友人の誰に向つても匿したことがない。予が公けに發言しなければならぬ場合には——國際労働者協會總務委員會に於て、また當地の共產主義者協會に於て——常に貴下を我黨の士として取り扱ひ、未だ曾て貴下との意見の相違點について言葉を漏らしたことがない」と(一八六八年十月十三日附)。これは容易に人に許さぬマルクスとしてはよほど愛嬌のいふ文言である。

シュワイツェルの「資本論」評論についてはマルクスはそのエンゲルスに與へた一八六八年三月二十三日附の手紙の中に「同時にシュワイツェルを送る。讀んだらどうか返送してくれ給へ。……シュワイツェルの附帶動機は何であらうとも、一つ彼に許さなければならぬことがある。其處此處で間違を犯しては

ゐるものゝ、とにかく彼はこの問題を骨折つて勉強してゐる、さうして何處に重點があるかを承知してゐる」と書いてシュワイツェルの才能を認めてゐる。(マルクス・エンゲルス往復書簡集のベルンシュタイン版には索引に、「資本論の理解」と題して上記の一節を指示してゐる。然るにリヤザノフ版の索引にはこれを掲記せぬのみならず、緒言の中にマルクスがシュワイツェルの才能を認めたと書くことを好まぬらしい語氣を漏らしてゐる。)

マルクスはこの通り初めは容易に理解されなかつたものである。マルクスは難解とされてゐる。私は必ずしもそれに賛成しない。難解難解と稱せらるゝために、かなり正常平明の解釋が妨げられたと思ふ。讀者の側で素直に納得できないことでも、何か深遠な理窟があるのだらうと、考へ過ぎて凝り過ぎて、獨り相撲に類する解釋を下した例が從來かなりあつたと思ふ。しかしいづれにしても「資本論」その他の著作が、その結構及び用語の上から見て決して平易な本でないことは勿論である。その理解に年月を要したのも無理ではない。しかしして潛心熟讀して漸くその眞髓を掴み得たと信ずる者は、まづその祖述と辯明とに力を注ぐのが當然の順序である。マルクスの死後五十年間に於ける大多數マルクシストの事業は、この祖述と辯明とに終始し、少數の例外を除けば未だマルクスから出發しながら忌憚なくマルクスを批評し、その缺陷、

不備、誇張、矛盾を指摘して大膽に自家の見解を述べるところにまで到達してゐない。反マルクシストは別として、マルクス主義者側からのマルクス批評は、彼の死後五十年の今日以後に期待さるべきである。

マルクスの人物

いろいろの問題に觸れるが、まづマルクスの人物について述べる。

マルクスの書簡、著述及び人々の記述を讀むと、彼は全體に於て、敢へて人民を愛さぬではないが、それよりも強く壓制者を憎むといふ側の人物であつたやうに見受けられる。私は嘗て彼の人物を評して、その孝子たり、良き夫たり、慈愛深き父たる一面と、その敵に對して辛辣毒惡厭ふべく憎むべき一面とが著しい對照をなしてゐると書いたことがある。その後フオアレンドアの「マルクス傳」(K. Vorländer, Karl Marx, Sein Leben und sein Werk, 1929, S. 6, 67.)を見ると、父の死後、婚約、職業の選擇、財産分配等の問題について彼は母親と不和になり、遂に全く和解するに至らなかつたやうであるが、しかし全體に於て、家庭の人としては彼は良き父であり、夫であつた。その書簡集を見ると彼がその子供のことを心配して書いてゐる箇處などは、殆ど可憐と評してもよいからゐる眞情を示してゐる。しかるに、そのマルクスが一度家庭外の

世間に出て、殊にその敵對者に面すると全く別人の趣を呈し、嘲罵、當てこすり、あらゆる手段を以て毒焰を吹きかけたことは、誰しも承知してゐる通りである。たゞ敵對者の攻撃に猛烈だつたばかりでなく、彼は愛する人が少く憎む人が多い人物であつた。彼は嘗て親しく交つた者と大概後には相背き、エンゲルスその他二三を除けば、彼と交誼の終りを全うした者がない。無論マルクス側としては言ひ分があるに相違ないが、彼が我執に強く、情誼や局量に缺ける點があつたと見ることも正當であらう。彼がエンゲルスの妻の訃音に接して、簡単に一二行の弔辭を述べた直ぐその後に、長々と自家の窮乏を訴へて金策を依頼し、さすがのエンゲルスを怒らしたのは（一八六三年一月八日、十三日、二十四日附書簡）無論一場の過失に相違ないが、しかしまた彼のデリカシイを缺いたエゴイストの一面を示したものと評されても致し方あるまい。

バクウニンやラッサアルは、これは元來マルクスの親友ではない。また彼等に對するマルクスの非難には、第三者から見ても充分の道理がある。しかし彼等に對するマルクスの態度や處置は、一々みな公正を失はぬものだつたとは考へられない。この點マルクス傳の權威者間に意見の相違があつて、フランツ・メエリンクが割合にバ、ラ、二人に對して寛大であるに對し、リヤザノフは一々マルクス

が正しくて相手が不當であるといふ立場から見えてゐるが（前記の妻の死亡を通知した返事に金の無心を持ち込んで、エンゲルスを怒らした事件も、ベルンシュタイン版と違つて、リヤザノフ版マ、エ、書簡集の索引には指摘してない）、これは公平とは思はれない。ラッサアル對マルクスの關係のことは少し調べたことがあるから、簡単に書いてみよう。

ラッサアルが一八六三年ドイツで社會黨運動を起した功績は、後にマルクスも承認した。前記のシユアイツェルに對して彼は「ラッサアルは十五年の假睡の後、再びドイツに勞働者運動を覺醒せしめた。——これは彼の不朽の功績たるもの」だと言つてゐる。しかしこれはラッサアル死後のことで、その生前に於ては彼はたゞにこの運動を援助しなかつたのみならず、エンゲルスとの往復書簡を見ると、二人はひそかにこの運動を攻撃する時の戰闘準備を整へてゐた。何故かゝる態度でこれに臨んだかといへば、マルクス自身に言はせると、ラッサアルの運動方針が彼と相容れなかつたからである。即ち「彼が餘りに時時目前の事情によつて動かされ、目的のために手段を擇ばなすぎたからであるといふ。これも充分理由のあることである。けれども別の場合には、マルクス、エンゲルス自身も、とにかく組織ある勞働者運動を起すことが肝要であつて、運動の初期に於ては綱領の原理などは餘り喧しく言ふには及ばない、といふ

態度を取つてゐる。例へばマルクスが起草した第一インタナショナルの規約理由書のごときにもそれが示されてゐる。別の機會にエンゲルスは、「どの國でも新たに運動に参加する國に於て肝要なる最初の第一歩は、獨立の政黨として勞働者を組織することであつて、それが特別の勞働黨でありさへすれば、如何にしてかは敢へて問はない」と明言してゐる。これらの場合と、ラッサアルに對する態度とは確かに違つてゐる。やはり此處にマルクス對ラッサアルの私交上の惡感情も働いたと見るのが當然であらうと思ふ。

マルクスとラッサアルとの交際は一八四八年以來のものであるが、爾來二人の間にはたびたび不愉快な出來事が起つてをり、一八六二年の夏ラッサアルがロンドンに彼を訪問した時、マルクスの不快は頂點に達した。

このマルクスがエンゲルスに向つて、汚物を吐き出すやうな調子でラッサアルを罵つた文言は、ベルンシュタインが原文のまゝには書簡集に收録し兼ねたものである。「ユダヤ人黒奴ラッサアルは幸ひにも今週の終りに出發するが、彼は相場をやり損つて幸ひもたや五千タレルを失つた。あの男は、利子と元金とが保障されてゐても、なほ金を『友人』に貸すよりは寧ろ泥溝へ投げるであらう。それは自分がユダヤ人男爵として、或は男爵化された（多分ハッツフェルト伯爵夫人を通じて）ユダヤ人として生活しなければならぬと

いふ考へから出發してゐたのだ。考へてみてくれ給へ。あの男はアメリカとの話その他を承知しながら、即ち僕の目下の危機を承知しながら、失敬千萬にも僕の娘の一人をハッツフェルトの『附添婦人』に出してはどうか、また僕自身をゲルステンベルクに世話させようかときくのだ。あの男は僕に時間を費させた。さうしてあの畜生 (Viel) は、僕が今何もし『仕事』をしないで『理論的勞作』のみをやつてゐるから、彼と一緒に時間を潰しても差支へないと思つてゐるのだ。この小僧に對して多少の外観を繕ふため、妻は釘付け、鑑留めになつてゐない物はことごとく質屋に運ばなければならなかつた。」

これは一八六二年七月三十日附の書簡の一節である。「そこへ持つて来て、作り聲の絶え間なき饒舌、美的でない見せつけの身振り、人を教へる語調だ」といふ文言もある。何故ラッサアルがこれ程の不快をマルクスに感ぜしめたかといふに、同じ手紙のなかの別の文言によれば、一にはドイツの文壇での成功者たるラッサアルの成金振り、學者氣取り、思想家氣取りに堪へられなかつたのである。

そこへ更に不愉快な金錢問題が擲^なりて來た。それはマルクスが窮境を脱するためにエンゲルスに手形を振り出させ、その引受けをラッサアルに求めたところが、ラッサアルが急のためエンゲルス自身の證明を要求したの

で、マルクスが怒つて皮肉を言ひ、それを更にラッサアルが怒つてマルクスに詰問したところから、兩者の感情が極度に悪化したのである。その後マルクスは反省したか、珍しく和解の態度を示し、お互ひに誤解があつたけれどもこれ程のことで仲違ひすべきではない、「吾々の友情に於ける實質的なものは、かゝる衝撃にも堪へ得るだけの力を有する」と僕は思ふ。……だから僕は吾々の古い關係が『すべてに續かんことを望む』と言つたのであるが（一八六二年十一月七日附ラッサアル宛書簡）、既に時機を失したのでラッサアルはこれに答へない。これで二者の交通は絶えたのである。前のエンゲルス宛書簡その他を讀んである第三者には、今更「吾々の友情の實質的なもの」云々といはれてもラッサアルの答へなかつたことが（無論ラッサアル自身はマルクス、エンゲルスの交通内容は知らないけれども）當然に感じられる。

この後間もなくラッサアルの運動が起つたが、マルクスは無論これを援けず、エンゲルスとの交通で盛んにラッサアル嘲罵を交換した。マルクスがラッサアルを援けなかつたのはその主義方針に不同意のためであるといふのは、無論事實である。しかしそれだけでは題のため仲違ひしたといつたのも、眞相は盡してゐないが、事實無根ではない。この點り

ヤザノフのマルクス傳は公平を失してゐると思ふ（拙著「社會問題研究」参照）。

これは一の挿話にすぎないが、マルクスの人物を描くための一の材料として引いた。マルクスは人を愛さぬとはいへないが、より多く、より強く憎み、嫌ふ型の人物であつたやうに見える。彼は共產主義社會の善美に憧憬しないわけではないが、遙かに強く資本主義社會の醜惡に反感を感じた。或る人のいふ通り、社會主義者たるマルクスの「資本論」には、資本主義のことは書いてあるが社會主義のことは書いてない。社會主義の建設よりも資本主義の崩壞の解剖が特に彼の性情に適したものである。彼が特にユトオピアを描かぬと稱する理論はよく分つてゐるが、しかしこの理論の背後にはこの偉大なる否定者の性情が働いてゐたやうに見える。彼がゴータ綱領案批評の回狀中に、數言將來の共產主義社會の狀態を嘆賞的に豫想して記したのは、ちよつと氣がゆるんだといふ形である。歴史の進行はつまり悪しき一面が善き一面を克服することにはかならずといふ説（哲學の窮乏）は、マルクスの發明ではないとしても、この憎惡者、否定者に最もふさはしい説である。

ゾムバルトはその著「プロレタリア社會主義」(Der proletarische Sozialismus, II, Bde, 1925)のなかでマルクスの性格の特色を五つ擧げてゐる。學問的稟賦、激情的支配慾、政治能力の缺乏、否定的攻撃の性情及び憎嫉

(Resentment) がそれである。また彼の性格の特色をなすものは、「敵に對する憎惡と報復慾、競争者に對する羨望と嫉妬、隨從者に對する君主慾、人類一般に對する深き輕蔑」だといふ評語にも同意してゐる (Bd. I, S. 73, 63)。ゾムバルトのマルクス評は決して公平冷靜なものとは受け取れないが、しかし度の強さを加減すれば、これらの評語に確かに同意し得るものがある。

ついでに記すとマルクスの人物については、マルクス自身の唱へた唯物史觀をマルクスの人物そのものに試みると稱して奇僻なる觀察を試みたものがある。「マルクス、生涯と事業」の著者オットー・リユウレがそれである (Otto Rühle, Karl Marx, Leben und Werk, S. 472)。リユウレはマルクスの人物をその健康狀態によつて説明せんとしてゐる。それによると、マルクスの生涯に於て肝臟病は夙から一の役目を働いてゐる。この病氣はマルクス家の世襲病と思はれ、マルクス自身もその遺傳があると思つてゐた。彼は生涯ひそかに肝臟病を恐れてゐた。彼の肝臟病は多分消化器の虛弱と胃腸全體の障害と密接の關係を持つてゐたものらしい。彼は肝臟病の徴候に苦しんだのみならず、重症なる新陳代謝機能の障害及びその附隨現象と見るべき食欲缺乏、便秘、胃腸カタル、痔疾、瘍腫等にも苦しんだ。リユウレはこの新陳代謝機能の障害にマルクスの性癖を求めてゐる。例

へばかくいふ。「彼が食事に對して正しき關係を有せずして、或は少く、或は不規則に、或は不愉快に食べ、しかしその代りにその食慾を常に mixed pickles (西洋福神漬の類) や、強き香料や醋漬の胡瓜やカギヤア等で刺戟したやうに、彼は仕事に對し、人間に對して正しき關係を持たなかつた。惡しき飲食者は惡しき勞作者、惡しき僚友である。彼は何も食はぬか、胃腸を飽滿せしむるか、全然仕事を厭ふか、仕事のために倒れるか、人間を避けるか、誰もが利益せぬすべての人の友となるか、である。彼は常に極端に動く。……學生として講義に出席し、職業のための準備をする代りに、彼れは哲學的文學的 pickles をその精神的胃腸に詰め込んだ。マルクスには規律と秩序の念と攝取と消化との正しき比例に對する感覺とが缺けてゐた。屢、幾月も全然筆を執らぬかと思へば、忽ち學問の深淵に突入してチタンの力を以て勞作し、晝も夜も藏書全部を掘り返して山のごとき拔萃を作り、部厚な原稿を書き、死ぬ時は半成未完の作物の堆積を後に遺した。……彼は甚だしく精神的美味を愛する人であつた。屢、家庭は飢に瀕して原稿料を待つてゐるのに、彼は締切到來の論說を、常に援助を辭せぬエンゲルスの古典に耽り、圖書館の最も貴重なる寶物を搜り、美味なる文學のカギヤアを舐め、或はスノップ的快樂を以て高等數學を

管んだ」(四五頁)。

唯物論的考察を個人の傳記に試みすることは決して無意義でない。しかし如何にこの方法を適用すべきかはよほど困難な問題である。昔の俗説とは反對に、今日の新しい通俗説は歴史進行上に於て特定の個人が勤める役割となるべく低く、小さく見ることに努めてゐる。これは無論反動として已むを得ないが、しかしシイザア、ナポレオン、ビスマルク、マルクス、レーニンの位置に他の何人を代りに置いても、歴史の經過内容に變りはなかつたといふことは、無論云へない。即ち特定個人の個性、——その勇氣、意志力、智能、性癖等——は確かに歴史の經過に影響する。そこでそれらの特定個人の個性は如何にして因果的に説明すべきものであるか。これを唯物論的に説明するとなれば、やはりまづ遺傳と環境とに着目しなければなるまい。従つて體質健康といふことも無論無視することはできない。しかし外界の事物が個々人の心意上に起す反應は、定量的に測定し得るものではないから、或る人の性格や遭遇をその疾病によつて説明せんとするときは、即ち例へばマルクスの人物を肝臟病患者として説明せんとするときは、目下のところたゞ奇抜な觀察と評すべきであつて、未だ學問的に價值ある結論としては取り扱ふことができない。たゞ此處にはリユウレの説を、往年のマックス・ノルダウの Entartung に類する性格解剖の一の

試みとして紹介するだけである。

マルクスとヘーゲル

次に、マルクスの思想についてあまり順序なく所感を述べたい。

マルクスにプロレタリア階級なるものゝ存在と人間解放者たるその歴史的使命とに着目せしめ、また而してその人間の解放は私有財産の解消によつて行はれることを納得させたものは、フランスの社會主義者及び共產主義者であつたといはれる。時々引用される通り、マルクスは初め共產主義反對者であつて、一八四二年十月十六日の文章では、まだ「共產主義思想には、その現時の形態に於ては、決して理論的現實性を認めず、従つて況やその實踐的實現を希はず、それを可能とも考へ得ぬ」と言つたのであるが、その後まもなく社會主義の確信に到達した。即ち一八四四年發表の「ヘーゲルの法律哲學批判」では、既にプロレタリアの革命的使命を教へ、ドイツ解放の積極的可能性を、私有財産の廢止を要求するプロレタリア階級の形成に求めた。

しかるにプロレタリアを發見し、社會主義の結論に到達する以前に、マルクスには既にヘーゲル哲學があつて、その一切の思想の出発點を成してゐる。ヘーゲルの歴史哲學は一箇の辯神論(Theodizee)だといはれてゐる。彼は世界史に於て、遂行せらるべき、且つ遂行せられたる合理的なる世界計畫、世界精神の形に於ける神の啓示を見たのである。「神は世界を統治する。その統治の内容、その計畫の遂行が世界史だ」と彼はいつてゐる。既に計畫であるからそれは豫定の終極目的がある。その終極目的は何か、人間の自由である。しかばこの終極目的のよつて實現せらるゝ手段は何であるか。人間の行爲、欲望、利害、激情の働き全體である。世界史上に於ては激情と私慾なしに何事も行はれるものではない。ヘーゲルはいふ。人間は本來善なるものだといへば、人は、何か偉大なことを言つたやうに思つてゐるが、何ぞ知らん、人間は本來惡なるものだといふ言葉は、更に遙かに偉大なことを言ひ現はしてゐるのである。こゝにいふ惡は、歴史的發展の動力が現はれる形式である。利慾や激情はそれ自體として決して善きものではないかも知れないが、この善くないものによつて世界史の終極目的が成就される。世界精神はその目的を實現するために、これら人間の欲望や利害關係や激情等を道具として、手段として利用する。各人はそれぞれ己の利害を追求して行動するうちに、知らず識らず、或はその意圖に反して、神の世界計畫を實現するやうに仕組まれてゐるのである。各人は主觀的には全然自由に獨立に行動してゐるつもりかも知れないが、人間は實は世界精神の傀儡であつて、世界精神によつて割り當てられた戯曲の役目を演じてゐるにすぎない。これ即ち彼の所謂「理性の

欺瞞」である。即ちヘーゲルにあつては、或る人または或る民族の歴史的使命といふ言葉が、たゞ一片の比喩的形容でない、眞實の意味を持つてゐる。即ち世界計畫を成就するために世界精神によつて特定の個人または民族に割り當てられた役目である。

マルクスは後にフョイエルバッハによつてヘーゲル主義の檻から出たといはれるが、しかし彼にとつても、世界史の終極目的が自由の實現であるといふことは變らない。たゞこの自由の實現せられた状態は如何なるものかといふと、マルクスは社會主義者の影響によつて、それは私有財産の廢止された状態であつて、この状態を實現すべき歴史的使命を擔へるものがプロレタリアであるといふ確信に到達したのである。

「哲學がプロレタリアに於て物質的武器を見出すごとく、プロレタリアは哲學に於てその精神的武器を見出す」云々は、マルクス自身の思想的閱歷の記録とも見ることが出来る。しかして既にヘーゲル哲學者がプロレタリアを發見すれば、私有財産の解消、共產主義の必然的實現は、たゞブルジョワ社會とプロレタリアとを對立せしむることによつて、それ以上は何らの實證的知識を俟つことなしにも、純論的に結論することが出来る。

「神聖家族」(一八四五年)の一節に彼はそれを試みた。彼は私有財産の世界の兩形成物として富とプロレタリアとを對立せしめ、この

對立が共產主義に於て止揚されることを説いた。陳腐であるがその本文を引用する。

「私有財産は私有財産として、富として己自身、またそれと共にその對立者、即ちプロレタリアを存續せしむることを餘儀なくされてゐる。これがこの對立の積極的方面、己自體に於て満足せる私有財産である。」

「これに反し、プロレタリアはプロレタリアとして己自身、またそれと共に、己を制約する對立者、彼をプロレタリアたらしむる對立者を即ち私有財産を、止揚することを餘儀なくされてゐる。これは對立の消極的方面である、それ自體に於ける不安、解消せられたる、また解消しつつある私有財産である……。」

私有財産からは對立維持の運動が起り、プロレタリアからは對立絶滅の運動が起る。

「尤も私有財産はその經濟的運動に於て、自ら己を驅つて自己の解消に赴かしめる。しかしそれは、己以外に獨立する、無意識なる、その意志に反して行はれ、事の性質によつて定めらるゝ發展によつて、即ちプロレタリアをプロレタリアとして造ることによつて、己の精神的肉體的窮乏を自覺せる窮乏、己の非人間化を意識し、従つて己自身を止揚する非人間化を造ることによつて

てそれをするのである。プロレタリアは私有財産がプロレタリアを造ることによつて自己の上に下した判決を執行すること、あたかも他人の富と己の窮乏とを造ることによつて賃銀労働が己自身の上に下した判決を執行すると同様である。プロレタリアが勝利を得ても、それはそれによつて決して社會の絶對的方面とはならぬ。何となれば、それはたゞ己自身とその對立者とを止揚することによつてのみ勝利を得るからである。その曉には、プロレタリアも、これを制約する對立者即ち私有財産も、等しく消滅してゐるのである。」

この引用によつて見れば、マルクスはこの時既にほぼ「共產黨宣言」の思想に近づいてゐる。しかしこゝに引用されただけのところでは、私有財産解消の必然性は、たゞ抽象的先驗的に論結されてゐるもので、まだ現實社會の實證的研究に基づいて論結したものである。敢へてその當時のマルクスが經濟學に不通であつたとは言はないが、假りに全く不通であつたとしても、ヘーゲルによつて「肯定—否定—否定の否定」なる階梯による事物の論理的發展といふことを學び、世界史の豫定目標は自由の實現であるといふことを學び、而してその上に、現行財産制度の否定者たるプロレタリアの存在を指示され、假りに現實社會の機構に無知識であつても、

プロレタリアは己自身とその對立者とを止揚することによつてのみ勝利を得る、といふ結論に到達することはできる。右に引用されただけの所では、社會主義の結論は辯證法應用例題の解答といふ程度以上には出てゐない。しかし無論マルクスの思索はこゝで停止してゐるものではない。

ヘーゲルの世界精神とマルクスの物的生産力

プロレタリアは私有財産の否定者であるといふ。そのプロレタリアは何時、如何にして私有財産を否定するか。マルクスはこゝで更に、その奥にプロレタリアそのものを動かす力を求めて、「物的生産力」に到達した。

プロレタリアは私有財産の否定者ではあるが、決して隨時隨意にその事を遂行し得るものではない。第一、プロレタリアの發生そのものが、彼自身の自由なる選擇の結果ではない。プロレタリア自身は、或は主觀的には自由に意欲し、自由に行動した積りかも知れないが、實は事物の背面にこれを促進し、または制約するものがある。物的生産力がこれである。

プロレタリアは舞臺の上で演技する役者である。しかしこの役者は勝手氣儘に動くのではなくて、舞臺の下、もしくは背後からこれを動かす作者がある。たゞ眞實の役者とは違つて世界史上の俳優は、自分が一定の筋書の

或る役割を演じてゐることを自覺せず、自分では全く自分の意思欲望に従つて自由に行動してゐる積りであるかも知れない。しかもその自覺するとせざるを問はず、客觀的には一定の筋書に従つて動くものであることに變りはない。マルクスはこの背後から舞臺上の演技者を動かす最後の力を物的生産力に求めたのである。彼は既に「神聖家族」のなかに、一時代の「工業、もしくは生命の直接生産方法」を知ることなくしてはその時代の歴史的現實を認識することは不可能である旨を暗示し、「歴史の出生地」は天上の雲霧の中ではなくて、地上の粗なる物質的生產に求めなくてはならぬと説いてゐる。しかるに「工業もしくは生命の直接生産方法」を知ることには經濟史經濟學によらなければならぬ。即ち彼が長足歩を以て經濟學の研究に邁進した所以である。

「ドイッチェ・イデオロギイ」のなかに彼等（マルクス、エンゲルス）は、生産力の發展が階級的對抗を發生せしめ、この階級的對抗がひとり階級的對抗のみならず、階級そのものを撤廢せんとする革命を生み出すといふことを、かなり明確に説いてゐる。生産力の發展とプロレタリア或は革命階級一般についてはいかに書いてゐる。

「生産力の發展上に於て到達する或る段階に於て、喚び起さるゝ生産力及び交易手段

は、現存關係のもとに於てはたゞ害のみをなし、従つてもはや生産力たらずして破壊力（機械、貨幣）たるに至る。——而して、これと關聯することであるが、社會の利益を享受することなしに、その一切の重荷を負担しなければならぬ一階級を、社會から押し出され、他のすべての階級に對して決然たる對抗に立つことを餘儀なくせらるゝ、一階級を出現せしめる。この階級たるや一切社會成員の多數者を成し、根本的革命的の必要に關する意識即ち共產主義意識のそれよりして發生するところの階級である。云云。」（Marx-Engels Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 5, S. 59.）

既にこの立場に立てば、また當然宗教哲學道德等の精神的產出物はすべて獨立の存在を有するものでなくて、窮極的には物的生産力から説明せらるべきものだとしなくてはならぬ。有名な「意識が生活を定めるのではなくて、生活が意識を定める」といふ文言も、既に「ドイッチェ・イデオロギイ」のなかに見出すことができる。かくしてマルクスのところでは物的生産力が最終のものになつた。しかるに物的生産力を吟味することは、經濟學の任でなければならぬ。「神聖家族」以前のマルクスが經濟に無知識であつたとは言はれないが（最近校訂發表せられたマルクスの「哲學的經濟學的手稿」は初期のマルクスの經濟

學勉強の跡を示してゐる）それ以後に於ける彼の主力が市民社會の經濟學的解剖に傾けられたことは當然である。この頃以後のマルクスには、その歴史學上の立場には何程の變化も認められないが、經濟學者としての彼は著しい進歩を遂げた。既に「ドイッチェ・イデオロギイ」（一八四六年）によつて唯物史觀の原理を學んだ者は、「經濟學批判序文」（一八五九年）に於ける有名な公式を見ても少しも驚くところはないが、「哲學の窮乏」（一八四七年）の經濟學と「資本論」（一八六七年）「餘剩價值學説論」に於けるそれとは同日にして語ることができない。たゞし注意すべきは、經濟學者として進歩したといふのは、資本的生產方法に對する解剖の精緻を加へ、經濟學文獻に對する知識が豊富を加へたことを指して言ふのであつて、私有財産制度の必然的解消といふ社會主義的結論は「神聖家族」の時代と少しも變つてゐない。故に別の章にも書いた通り、マルクスの經濟學研究はマルクスの結論を動かしてはをらぬ。彼の經濟學研究は既成の「構造を改變せぬ限り」に於ての竣成必要工事——恐らく若干の補強工事及び裝飾を含む——であつた。

以上のごとくに於てマルクスはヘゲルを離れ、彼自身の言ふところによれば「ヘゲルとは正反對の」辯證法を得た次第である。なるほど確かにマルクスの辯證法とヘゲルのそれとは違つてゐる。理念と物質、意識と

生活とに關する二者の見方は確かに正反對だといつてよい。しかしなほそれにも拘らず、吾々はマルクスに對するヘーゲルの強い影響を看過することができない。それはマルクスもヘーゲルも共に世界史を以て既定の世界計畫の遂行と見てゐることである。世界史の窮極目的は、兩者いづれにとつても既に定まつてゐる。ヘーゲルにとつては自由の意識の實現である。マルクスにとつては私有財産の解消による人間の解放である。世界史に直接參加する者はいづれも現實の人間であり、人間は種々なる欲望、野心、本能等によつて動かされて動く。しかしその直接の動機の何たるによらず、それら個々人または集團の行動は必ず人類を一定の方向に導く結果の生ずるやうに按配せられてゐる。その一定の結果が必ず生ずるやうに按配する者は誰であるか。無論ヘーゲルの場合には世界精神であるし、マルクスの場合には物的生産力である。人間はヘーゲルの場合に世界精神の道具として使はれるやうに、マルクスの場合には物的生産力の傀儡として踊らされる。ヘーゲルは英雄の世界史上に於ける役目を論じてゐる。それによれば、英雄とは自己の欲望と世界計畫の必要との一致せる人々、「その自己特殊の目的が、世界精神の意志なる實體的なものを含める」偉大なる人々をいふものであつて、歷史上に於ける偉大なる事業はこの世界的な人格の激情によつて始めて行はれるといふ。こ

れは正にマルクスのプロレタリア觀に相當する。プロレタリアがブルジョワジイの搾取抑壓を撤廢せんとするは、ブルジョワジイがこれを維持せんとすると等しく同じ程度の私慾に發してゐる。しかもプロレタリアのこの私慾の行動は、自由の實現といふ世界史の窮極目的を實現する道具となる。即ちプロレタリアは正にその特殊目的と世界史の必要との一致せる英雄（ヘーゲルの場合に於ける）である。たゞこの英雄は、ヘーゲルの場合に於けるごとく世界精神の道具でなくて、すべての上に支配する物的生産力の道具として、その志すところを遂行する使命を擔ふ英雄である。こゝに物的生産力の「志すところ」と書いたのは必ず異様に思はれるのであらう。無論物的生産力に意志のある筈はない。しかしマルクスの歴史觀上に於ける物的生産力といふものが、ヘーゲルの世界精神のごとく、「志すところ」があり、また志すところを必ず遂げる力を有するものゝごとくに取扱はれてゐることも事實である。プロレタリア階級の歴史的使命といふ言葉を屢々マルクシストは口にす。しかし「使命」といふことは、嚴格にいへば、一定の目的の達成を托せらるゝ場合に始めて意義をなす筈である。ヘーゲルの場合には、歴史は或る目的の遂行過程であるから、無論それは嚴格な意味に解しての意味を有する。しかしマルクスの場合には、本來物的生産力の發展のため因果的に或る結果

が生ずるといふに止まり、世界計畫を立て、世界史の終極目的を豫め定める者はない筈でなくてはならぬが、しかもなほ且つ或る階級の歴史的使命を云々するのは、暗々裡にやはり世界史を、人間を道具に使つての或る目的の遂行過程と見るからであらう。その目的は誰が立てたか。無論マルクスは生産力以上の理念を此處へ持ち出すわけに行かない。彼にとつては物的生産力が最高最終のものでなくてはならぬ。即ちマルクス及びマルクシストが往々物的生産力を必ず一定の方向に動く意志あるものであるかのやうに取り扱ふ所以である。現在社會の興へられたる條件のもとに於て資本主義の崩壞、共產主義の實現は多くのボシビリチイのなかの一にすぎない。マルクシストがこれを唯一のボシビリチイとして説いてゐるのは、運動者の志氣を鼓舞する戰術上の策略も含まれてゐると思ふが、同時に世界史を以て既定の目的の實現行程と見るヘーゲルの歴史觀の影響も看過することができぬ。

マルクシズムと 千年王國の信仰

マルクスの唯物史觀なるものが物的生産力を絶對的なものとし、この物的生産力が入類を驅つて既定の世界計畫を遂行せしめるとなす歴史形而上學に陥らんとする趣があり、而してこの點に於て強くヘーゲルの影響を示